

倫理的意思決定の包括モデルの活用について ～障がい者に対する意思決定支援の事例を用いた検討～

田岡 紀美子

抄録

本稿では、障がい者に対する意思決定支援の事例（5事例）を用いて（これらの事例からソーシャルワーカーなどの意思決定支援者の倫理的ジレンマを抽出）、倫理的意思決定の包括モデルの活用方法について、その手順に沿って検討することを目的とした。結果、事例の内容分析と倫理的ジレンマの根拠の提示をさらに丁寧にするべきであるという課題は残ったものの、倫理的意思決定の包括モデルの活用については、これだけの手順に沿って行うためにはそれなりの訓練が必要であることと、特に実践の場で行うにはコンサルタントやスーパーバイザーの力が必要となるのではないかと考えられる。しかし倫理的意思決定に必要な多面的な考察ができるため有効であると考えられた。

また、本稿は「Ⅰ. はじめに」で目的を示し、「Ⅱ. 倫理的意思決定の包括モデルについて」で McAuliffe と Chenoweth の開発した倫理的意思決定の包括モデルの概要と根拠となっている考え方について触れる。その他「Ⅲ. 研究方法」、「Ⅳ. 意思決定支援事例の内容分析」、「Ⅴ. 倫理的意思決定の包括モデルの活用方法」、「Ⅵ. おわりに」の順で論じていった。また「Ⅴ. 倫理的意思決定の包括モデルの活用方法」は「Ⅱ. 倫理的意思決定の包括モデルについて」で紹介した各ステップで想定される質問（表1）を基に表3を作成してまとめている。

キーワード：倫理的意思決定の包括モデル 障がい者の意思決定支援 倫理的ジレンマ

Ⅰ. はじめに

ソーシャルワークの実践では、倫理的な複数の価値が対立することがあり、どちらの選択が正しいのか不明瞭であるような、2つの等しく歓迎されざる二者択一的な問題に直面することがある。例えば、ソーシャルワーカーは非常に生活に困窮した状態にある人を助けるために在宅介護サービスを適用すべく基準を曲げるべきなのか、あるいはルールに固着し、本当に支援を必要とする人の申請を断るのか。ソーシャルワーカーは、この個別的な利害と、すべての人に適用されるルールや基準をもつ公共の利害との間にある対立／葛藤に直面する（Banks, 2012, p24）。このような倫理的ジレンマについて、Banks（2012）は、倫理的意思決定の包括モデルについて、適切な意思決定を行うのに有益なモデルを検討し、何が正しいのかについての判断を下すことよりもむしろどのようにしてこの判断を実践へ移行させるのかを決定するといった、難しい困難な状況におけるものにも活用できると述べている。そこで本稿では、この倫理的意思決定の包括モデルの活用方法について検討することを目的とした。そして、活用場面としては、障がい者の意思決定支援を想定することとした。意思決定支援とは、認知症や知的障がいなどの原因によって十分に意思決定ができない人が、特定の意思決定や選択、希望を他者に表出する際に提供される、さまざまな支援のこと（名川・水島・菊本, 2019）とされている。これを踏まえて特に意思表出が難しいと考えられる重度の知的障がいや自閉症などを持つ障がい者への意思決定支援の事例を活用することとした。これらの利用者の意思が明確に表出されない場合には、サービスの選択や生活の場の決定などの意思決定を求め

られる場面において、ソーシャルワーカーなどの意思決定支援者には倫理的な葛藤が生じると考えられる。そのため、障がい者への意思決定支援の事例（5事例）から、倫理的ジレンマになりうると考えられる内容を抽出し、それを倫理的意決定の包括モデルの手順に沿って検討することとした。

また、ソーシャルワークにおける主要な3つの倫理としてBanks（2012）は、「正義の倫理（カント派、功利主義）」と「ケアの倫理」、「（美）徳の倫理」をあげている。さらにこの3つの倫理のバランスをどのように考え、刻一刻と変化する実践の実情を理解・評価（アセスメント）し、その都度その都度の介入行為にどのように応用していくかにあるとしている。また、Banksはカント派の倫理と功利主義の倫理は、ソーシャルワークの定義にある「人権と社会正義」を達成するにあたって、必要とされるものであり、「正義の倫理」と共存する面台として「ケアの倫理」の必要性を訴えている。さらに専門職に求められる「高潔さ」を担保とするものとして「徳の倫理」が要請している内容があるとしている。障がい者の意思決定支援事例の中から倫理的ジレンマとなりうる内容を抽出し、包括モデルの手順に沿って検討する際にもこれらのことを踏まえて考えていくこととする。

Ⅱ. 倫理的意決定の包括モデルについて

Donna McAuliffe と Lesley Chenoweth は、「Leave No Stone Unturned: The Inclusive Model of Ethical Decision Making（2008）」において「倫理的意決定の包括モデル」の開発と適用について詳述している。本節では、この「倫理的意決定の包括モデル」について概要を説明し、後の節でこのモデルを障がい者の意思決定支援について記述された事例のなかで描かれている倫理的ジレンマ場面での活用方法の分析を行うこととする。また、倫理的ジレンマの場面は障がい者の意思決定支援について記述された5つの事例をKHcoderにて内容分析し、事例で描かれている障がい当事者や家族を含む関係者、活用される社会資源との関係などから倫理的ジレンマとなり得る場面を想定することとした。

まず、McAuliffeとChenowethはソーシャルワークにおける倫理的意決定は「ソーシャルワーカーが、倫理的問題やジレンマを解決するための、批判的考察、評価、判断のプロセス」と定義されていることを紹介している。そして「倫理的意決定の包括モデル」は、これまでに開発されてきた「プロセス（合理的）モデル」、「リフレクティブ（内省的）モデル」、「カルチャラル（文化的）モデル」などのモデルを包括するものとして開発されたと説明している。また、このモデルは、McAuliffeとChenowethがメンタルヘルスや障がい、コミュニティ開発、ヘルスケア、ユースワークやリーガルソーシャルワークの分野で長年実践してきた経験をもとに開発されたものである。

この倫理的意決定の包括モデルは、意思決定や優れた実践に重要な4つの「本質的な次元」または「プラットフォーム」を土台として、その上に5つのステップがあると考えている（図1）。まず、4つのプラットフォームは、「説明責任」、「批判的考察」、「文化的感受性」、「相談」であり、5つのステップは「1. 倫理的ジレンマの定義」、「2. 正当性のマッピング」、「3. 情報収集」、「4. 代替アプローチとアクション」、「5. 批判的な分析・評価」としている。

（1）プラットフォームの概要説明（McAuliffe & Chenoweth, 2008, p41-43）

①説明責任

これは、「自分が何をしたのか、または何をしなかったのかを説明するように求められる（Banks（2004 p.150）」ことに対する責任として説明されており、「説明責任の焦点は、彼らが活動するより広い社会的文脈を考慮に入れながら、行われた決定を明確にし、正当化するワーカーの能力である」としている。

②批判的考察

これは「優れた実践の基礎であり、批判的に認識し反省するワーカーは、自分自身の価値観のパターン

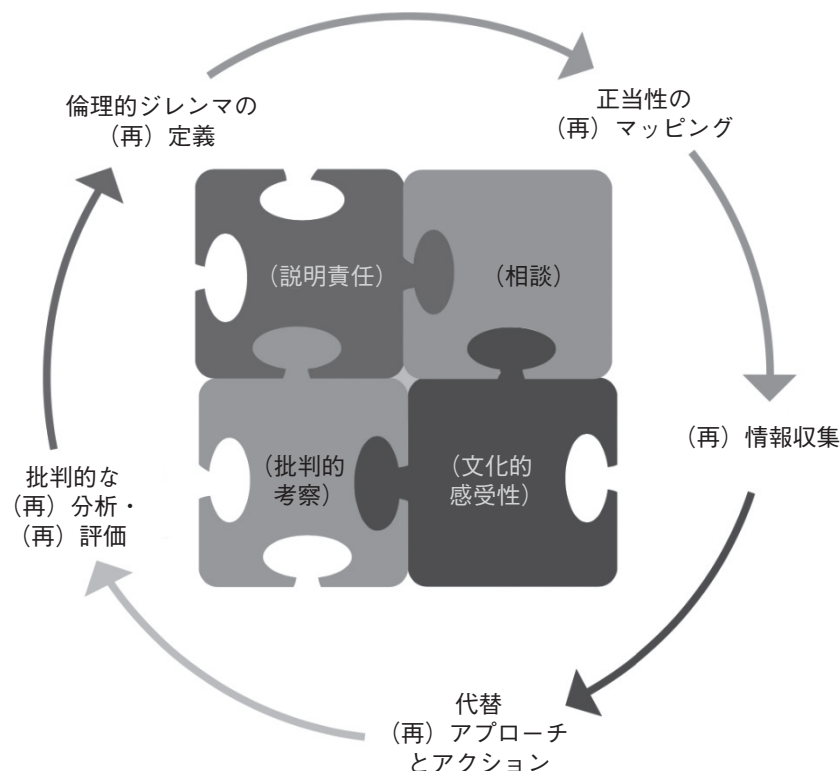


図1. 倫理的意思決定の包括的モデル (McAuliffe & Chenoweth, 2008) (日本語訳：筆者追記)

や個人の価値観が意思決定に与える影響を認識する可能性が高くなる」としている。

③文化的感受性

ポストモダンの世界では、他者の世界観を尊重することが最も重要であり、必要不可欠なものである。そのため「文化的に配慮されていないやり方は、ワーカーに差別の申し立てをする余地を与え、適切な文化的対応を回避したり、重要な文化的規範を無視した行動をとれば、壊滅的な結果をもたらす可能性がある」としている。

④「コンサルテーション」

「他者の知恵と助言を賢く利用し、誠実さと慎重さのために重要な価値を守るために、実務家を助けてくれそうな他者と議論を交わす行為」とし、「相談は倫理的意思決定の一部として見過ごされがちであり、多くの実務家は、同僚から「専門家ではない」または「優柔不断」とみなされることを恐れて、複雑な倫理的負担を黙って担っている (McAuliffe & Chenoweth, 2005)」としている。

(2) 5つのステップの概要 (McAuliffe & Chenoweth, 2008, p43-47)

ここでは、①～⑤で各ステップの概要について記述し、ステップごとに想定される質問と質問の基盤となっているプラットフォームについて表1で示すこととする。

①Step 1：倫理的ジレンマの定義

倫理的ジレンマは、Banks (2005) によって「ワーカーが、道徳的原則の対立を含む可能性のある、同じように歓迎できない二つの選択肢の間の選択に直面し、どちらの選択が正しいかはっきりしない場合」と定義されている。倫理的ジレンマは、2つの競合する原則を明確に定義する場合に生じ、Rothman (1998, p 4) はこれを「ジレンマの定式化 (形成)」と呼び、競合する原則の特定が明確にされない限り、前に進むことはできないと主張している。また、この競合する原則を定義するためには、特定の状況において倫理的な専門知識を持つ人の支援が必要な場合や、法的なアドバイスが必要な場合もあるとしている。

②Step 2：正当性のマッピング

「状況を総合的に評価し、対人関係、家族関係、地域社会のさまざまなレベルの関係者の関係性の本質を見極める力 (McAuliffe & Chenoweth, 2008, p44)」が良い実践には重要であるとし、倫理的ジレンマには多くの人が巻き込まれる可能性があり、そこには関係のある人が排除され関係のない人が関与してることがあるため、どの人が必要な人なのかを見極めることが大切になる。また、定義された倫理的ジレンマを、当事者（利用者・クライアント）と共有すべきかどうかを検討することも必要となる。

③Step 3：情報収集

情報収集は、どのような評価プロセスにおいても不可欠な要素とし、収集すべき情報は、「実践基準、プロトコル（規約・手順）、判例、組織の方針などより具体的なものであること。文書や方針・手順から、個人的、職業的、社会的な価値観（哲学的）の分析が含まれる (McAuliffe & Chenoweth, 2008, p44)」としている。また、倫理的ジレンマに陥りやすい異常な状況に直面した時には、経験のある実務家であったとしてもすべての事に精通しているわけではないため、情報収集の指針となる質問をすることで、必要な情報へアクセスしていくことが重要であるとしている。

④Step 4：代替アプローチとアクション

「関連性のある情報を集め、関連性のない情報をすてることで、その状況に関する知識のパッケージが出来上がり、それを整理して検討することができる」とし、さらに「ソーシャルワーカーやその他の援助職は、権力の乱用の可能性や、弱者やしばしば無力化された他者の立場を十分に考慮せずに行動することの危険な結果をよく理解している」としている。そのため、「意思決定の根拠が規則、法律、政策、指針、普遍的な適用（非論理的立場）であるか、あるいは結果や大善の概念（功利的立場）であるかを理解する上で重要な意味をもつ。もし、人間関係や善良な人格をより重視するのであれば（ケアの倫理、美徳の倫理）、判断の方向性も変わってくるだろう」と述べている。この段階では意思決定の指針となる質問をして、意思決定の根拠を明確に理解して実施することができるとしている。

⑤Step 5：批判的な分析・評価

「実践を批判的に振り返る時間を作ることで、意思決定のプロセスが自己と他者に与える影響を考慮する余地が生まれ、困難な感情的に消耗する経験（多くの倫理的ジレンマがそうであるように）となり得るものを、より建設的な学習体験に変えることができる (McAuliffe, 2005)」としている。また多忙な実践の中で、一つの支援が終わったら、重要な分析や評価段階がおろそかになってしまう現実があるとも述べている。

表1. 倫理的意思決定の包括モデルにおける各ステップで想定される質問 ((McAuliffe & Chenoweth, 2008より筆者作成)

| Step | 想定される質問 | 基盤となるプラットフォームの項目 |
|-------------------------|---|-------------------------------|
| Step 1 倫理的ジレンマの定義 | ①競合する倫理原則を明確に定義できるか。できる場合それは何か。できない場合、自分の考えを明確にするために、適切な他者と相談する必要はあるか。この状況には文化的な問題が含まれるか。 | ・コンサルテーション ・文化的感受性 |
| | ②もし、これが倫理的ジレンマだと判断した場合、自分はその中でどこに位置するのか。決断を下すのは自分の役割なのか、それともこの状況をより高い権限を持つ人にゆだねるべきか。 | ・説明責任 |
| | ③この状況は自分にとって身近なものなのか、それとも新しい知識が必要か。過去の経験や他の状況での仕事から学んだことを活かせるか。 | ・批判的考察 |
| Step 2 正当性のマッピング | ①この状況で誰が正当性をもっているか。誰が含まれ、誰が除外されるのか。考慮すべき文化的要因はあるか（例：先住民のクライアントの場合、大家族や親族）。 | ・文化的感受性 |
| | ②この倫理的ジレンマを他者と共有することは適切か。これは自分一人が直面している倫理的ジレンマなのか、それとも他者も巻き込んでいるのか。この段階では、誰が誰に話すべきか。 | ・コンサルテーション ・説明責任 ・批判的考察 |
| Step 3 情報収集 | ①専門家の倫理規程、プロトコル、方針、手順によってどのような指針が示されているか、また法的な考慮事項はあるか。 | ・説明責任 |
| | ②個人的な価値観、職業上の要求、組織の義務との間に矛盾はないか、またこれらの矛盾は意思決定や他者に問題をもたらし可能性はあるか。 | ・批判的考察 |
| | ③研究、文献、他者の経験など、このジレンマに光を当てることができる他のリソースはあるか。 | ・コンサルテーション ・批判的考察 |
| | ④この段階で、新しい知識を得るため、あるいは倫理規定、政策、法律が取る立場を明確にするために、誰に相談することができるか。 | ・コンサルテーション |
| | ⑤特定の文化的知識が必要か、必要な場合、誰に相談すべきか。 | ・文化的感受性 |
| Step 4 代替アプローチとアクション | ①知識や情報を集め、様々な価値観を検討した結果、どのような行動を取ることができるか。 | ・説明責任 |
| | ②何を根拠に、どのように自分の行動を正当化するのか。 | ・説明責任 |
| | ③他の選択肢を見逃していないか、どうすればすべての選択肢を検討したと確信できるのか。また自分の立場を明確にするために、誰か「悪魔の代弁者」になってくれる人はいないだろうか。 | ・コンサルテーション |
| | ④これらの選択肢の中に、文化的な差別や無神経さを感じさせるものはあるか。 | ・文化的感受性 |
| | ⑤自分が下した決断をどう感じているのか、なにか違うことはないのか。この決断を受け入れることはできるのか、また、求められた場合、それを正当化できるか。この決断をどのように実行し、文書化すればよいか。 | ・批判的考察 ・説明責任 |
| Step 5 批判的な分析・評価 | ①この状況から、自分の意思決定の方法について何を学んだか。これまでの意思決定パターンから行動を変えたか。 | ・批判的考察 |
| | ②このプロセスにおいて、自分が文化的に配慮した行動を取ったことに自身がもてるか、あるいは探求を怠った文化の側面があったか。 | ・文化的感受性 |
| | ③相談や支援を賢く利用できたか、倫理的ジレンマについて相談する相手を選べたか。他の情報を得るために連絡できる、あるいは連絡すべき人はいたか。 | ・コンサルテーション |
| | ④サービス利用者に悪影響を及ぼす組織の方針・手順、倫理規定、その他のプロセスの欠陥に関して、注意を喚起する必要がある問題はあるか。一日の終わりに、自分の決断をし、自分の行動について自信をもって議論し、意思決定プロセスにおける自分の役割に責任をもつことができるか。 | ・説明責任 |

Ⅲ. 研究方法

ここでは、これから先の節において分析する手順を示すこととする。

①事例の内容分析

「障害福祉サービス等の提供にかかる意思決定支援ガイドブック」と「事例で学ぶ 福祉専門職のための意思決定支援ガイドブック」に記載されている事例をKHcoderで内容分析を行い、事例に書かれている内容について分析する。

使用する事例は、「障がい福祉サービス等の提供にかかる意思決定支援ガイドブック」から3事例、「事例で学ぶ 福祉専門職のための意思決定支援ガイドブック」から2事例引用し分析対象とした。事例の詳細については、厚生労働省（2017）及び名川ら（2019）を参照してもらいたい。

②意思決定支援事例の内容分析の結果から、事例中にある倫理的ジレンマが起ころうな場面を抽出する。

ソーシャルワーカーやその他の援助者が実践の中で、定期的に直面する倫理的ジレンマ（倫理的意思決定が求められる場面）は、ケアの義務や守秘義務、プライバシーと開示、選択と自律性、資源の分配などが考えられる。これらの場면을想定して場面の抽出を試みたいと思う。

③②で抽出した場面を使用し、McAuliffeとChenowethの「倫理的意思決定の包括モデル」の手順に沿った分析を行う。

Ⅳ. 意思決定支援事例の内容分析

内容分析に使用した事例は「障害福祉サービス等の提供にかかる意思決定支援ガイドライン」から「日中活動プログラムの選択に関する意思決定支援」と「施設での生活を継続するかどうかの意思決定支援（施設入所支援を利用して）」、「精神科病院からの退院に関する意思決定支援」の3事例を引用し、「事例で学ぶ 福祉専門職のための意思決定支援ガイドブック」からは「自閉症、一人暮らし（事例タイトルは筆者作成）」の事例と「重度知的障害、親子三人暮らし（事例タイトルは筆者作成）」の事例を引用した。これらの事例を分析対象とした理由は、「障害福祉サービス等の提供にかかる意思決定支援ガイドブック」については記載されている事例がこの3事例であったということで3事例すべてを引用することとした。次に「事例で学ぶ 福祉専門職のための意思決定支援ガイドブック」には、他にも認知症高齢者や精神障害などの事例も記載されていたが、先述の3事例が重度知的障害、知的障害と自閉症、精神障害と知的障害という事例であったこともあり、重度知的障害と自閉症の事例のみを使用することとした。

（１）内容分析の手順

まず、使用する事例を段落ごとにエクセルの最初の列に入力し、他の列に出典文献名、項目名、段落番号を外部データとして入力し、分析データの準備を行った。準備したデータをKH coderを使用して、前処理を行った後、「①抽出語リスト」、「②共起ネットワーク」の作成、③共起ネットワークの結びつきから倫理的ジレンマの抽出を行う。

（２）抽出語リスト（表２）と共起ネットワーク（図２）について

抽出語では、「する」という動詞が一番多かったものの、次に「本人」、「支援」、「意思」の順で多かった。これは、障がい者支援のなかでも意思決定支援は、本人の意思をいかに表出するのか、またそこからいかに支援していくかを考える必要があり、事例の内容も本人の意思や支援に着目していることからこのような結果となったと思われる。

また、これは、抽出語「本人」のコロケーション統計で直前（左）、直後（右）の出現頻度をみたところ、「意思」の語の出現数は、22回で後（右）2が16回と一番多かった。出現の仕方は、「本人の意思」という形が多いことがわかった。次に抽出語「意思」のコロケーション統計では、「決定」の語の出現数が48回

で最も多く、出現箇所は後（右）1が47回と多かった。また次に多かったのは「支援」の語であり37回の出現数だった。出現箇所は後（右）2が27回と多かった。このことから、事例中には27回「意思決定支援」の語が使用されていることがわかる。

抽出語で3番目に多かった「支援」のコロケーション統計では、出現数として一番多かったのは、「意思」37回で出現位置は前（左）2の26回その他の語では多い順に「決定」34回、前（左）1、26回、「相談」23回、前（左）1、19回、「専門」19回、後（右）1、17回となっている。

次に意思決定支援事例の共起ネットワーク（図2）で事例内容で強い結びつきのある内容を確認する。まず図2中に示した図2-1の共起ネットワークでは、「本人－支援－意思」や「支援－意思－決定」に強い結びつきがあることがわかる。また「支援－意思－決定」は、「意思決定支援」の語であることがわかる。さらにここには、「相談」「会議」「専門」の語との結びつきがあり、それぞれ関連している。そして、「支援」は「生活」と結びつきがあり、「本人」は「考える」と結びついている。図2-2の共起ネットワークや図2-3の共起ネットワーク中にあるアルファベット「B」や「C」などは人物を表しており、図2-2では、「B」と「経験」「施設－利用」「サービス－利用」「管理」「継続」などサービスを利用することに関連する語との結びつきがある。図2-3では、「C－D－話す」「C－D－自宅」などの人物CとDの関係の結びつきがみえてくる。

これらのことから、障がい者の意思決定支援について取り上げた事例では、「意思決定支援」が中心的な題材であることはもちろんだが、「本人の意思や考え」や「家族（CとD）の関係」、「福祉サービスとの関連」が取り上げられていることがわかる。

表2. 抽出語リスト（上位20）

| 順位 | 抽出語 | 抽出数 | 順位 | 抽出語 | 抽出数 |
|----|-----|-----|----|----------|-----|
| 1 | する | 314 | 11 | 考える | 42 |
| 2 | 本人 | 133 | 12 | 家族 | 30 |
| 3 | 支援 | 123 | 13 | 自分・確認・相談 | 29 |
| 4 | 意思 | 92 | 14 | 行く | 28 |
| 5 | ない | 80 | 15 | 母親 | 27 |
| 6 | できる | 79 | 16 | 行う・GH・希望 | 26 |
| 7 | 生活 | 70 | 17 | 利用 | 24 |
| 8 | ある | 58 | 18 | 会議・ない | 23 |
| 9 | 決定 | 55 | 19 | 観覧・経験 | 22 |
| 10 | なる | 50 | 20 | 体験 | 21 |

※ GH：グループホーム

（3）共起ネットワークから倫理的ジレンマの抽出

前述の共起ネットワークの結びつきから事例で取り上げられている内容として。「意思決定支援」を中心として、「本人の意思や考え」、「家族（CとD）の関係」、「福祉サービスとの関連」であるとした。これらはそれぞれ記載されている事例が「本人の意思や考え」は「自己効力感を高めるための意思実現支援（名川ら、2019、p84-95）」であり、「家族（CとD）の関係」は「精神科病院からの退院に関する意思決定支援」、「福祉サービスとの関連」は「施設での生活を継続するかどうかの意思決定支援」である。本節では、これらの事例のうち、「施設での生活を継続するかどうかの意思決定支援（福祉サービスとの関連）」についてどのような倫理的ジレンマが抽出できるかを検討していきたいと思う。

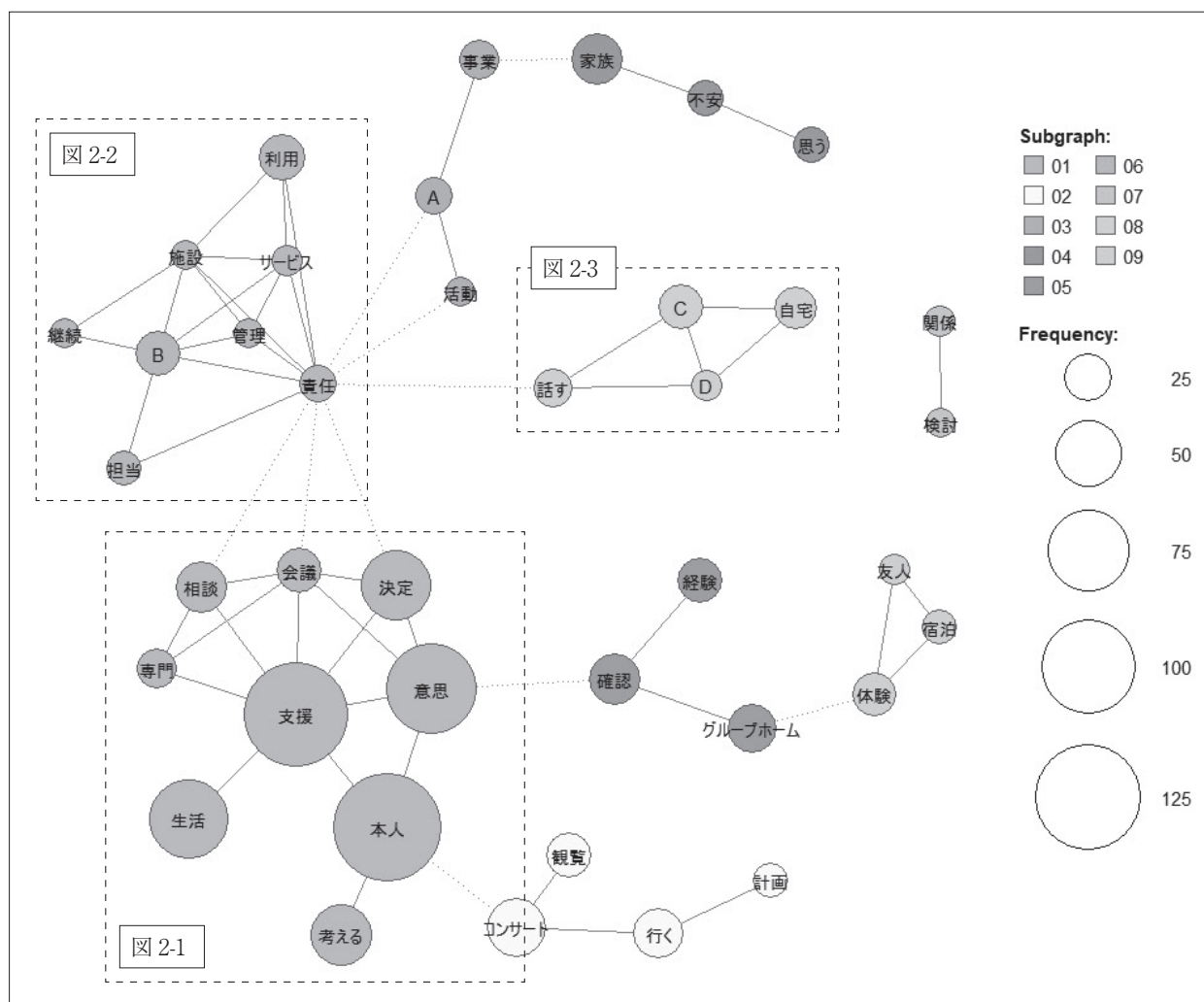


図2. 意思決定支援事例の共起ネットワーク

①事例の紹介（施設での生活を継続するかどうかの意思決定支援（厚生労働省、2017、p12-13）（筆者要約））

Bさん：知的障害と自閉症があり、言葉によるコミュニケーションが難しい状態。施設入所支援を利用（15年）。家族は亡くなっており、成年後見人が選任されている。

担当の相談支援専門員：継続サービス利用支援によるモニタリングで、今後も引き続き施設入所支援を利用するかグループホーム等に生活の場を移行するか、Bさんの意思決定支援が必要であると考えている。

意思決定支援会議：相談支援専門員（意思決定支援責任者）、Bさん、成年後見人、施設入所支援のサービス管理責任者、Bさんの担当職員、グループホームのサービス管理責任者が参加し会議を開催。この会議で話された内容は、成年後見人からBさんの生活の安定のためには慣れた施設の方がいいのではないかとということと、Bさんが帰省した際の自宅での様子（自分でお湯を沸かし、カップラーメンを食べるなど）が話された。施設のサービス管理責任者と担当職員からは、施設での様子（目の前にある洋服や食べ物の中から自分の気に入った物を選んだり、絵カードや写真カードからその日の活動を選んだり）はできるが、経験したことがないことを選ぶのは難しいこと（）が話された。これらの話を受けて、グループホームのサービス管理責任者からは、グループホームの体験利用が提案された。

この後、事例内ではBさんがグループホームの体験利用をすることで、グループホームでの生活はBさんの生活経験が増え、活動範囲が広がる様子が描かれ、施設での生活かグループホームでの生活かは、Bさんの状況をみるとあきらかであろうという形で締めくくられている。

②倫理的ジレンマの抽出

この事例は、意思決定支援のために意思形成支援が行われ、結果Bさんにとって良いだろうと考えられる生活の場が選ばれるというものである。また、Bさんの事例の共起ネットワークは図2-2であり、Bさんと結びついている語は、「サービス－管理－責任」や「施設－サービス－利用」、「B－施設－継続」、「B－担当－責任」などBさんを中心に社会資源が取り巻いている状況がみえてくる。また、施設サービスを継続するか否かを最初に検討しようとしているのは、Bさん担当の相談支援専門員であり、Bさんの意思決定が必要であろうと考え意思決定支援会議が開かれている。ここで問われるのは意思決定支援会議で話された内容がどこまでBさんの意思決定であると判断されるのかということとBさんのように知的障害と自閉症があることで言語的なコミュニケーションが難しい（意思表出が難しい）場合の意思決定の判断であると考えられる。このことから、この事例から想定される倫理的ジレンマは「選択と自律性」であるとしたい。

これをもと次節では、倫理的意思決定の包括モデルの活用方法について検討していくこととする。また、検討する際に誰の倫理的ジレンマなのかについては、Bさんの支援担当者である相談支援専門員とする。

V. 倫理的意思決定の包括モデルの活用方法

前節で検討した事例について以下の表3にて倫理的意思決定の包括モデルの活用方法を検討することとする。

表3. 施設での生活を継続するかどうかの意思決定支援を用いた倫理的意思決定の包括モデルの検討

| Step | | 事例から検討される内容（想定される質問） | 基盤となるプラットフォームの項目 |
|------|------------|--|---|
| 1 | 倫理的ジレンマの定義 | <ul style="list-style-type: none"> ・ジレンマの定義：Bさんのサービス利用選択と自律性 ・競合する考え：Bさんの支援担当の相談支援専門員は、サービスの変更を踏まえた検討が必要であると考えたが、Bさんの成年後見人は今の生活で落ち着いているならばそのままでもいいのではないかと考えている。 ・本事例は、文化的な問題は抱えていないと考えられる。 ・意思決定：意思決定支援会議による合議 ・Bさんに対する意思決定支援は、担当の相談支援専門員の過去の経験や他の状況での仕事から学んだことを活かせると考えられる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・説明責任 ・批判的考察 |
| 2 | 正当性のマッピング | <ul style="list-style-type: none"> ・Bさんは両親を亡くしており、サービス利用選択と自律性のジレンマへの倫理的ジレンマについて正当性を持つものとしては、Bさんの成年後見人とBさん担当の相談支援専門員であると考えられる。 ・この倫理的ジレンマについて他者と共有することの適切さに関しては、意思決定支援会議のメンバーには共有することは適切であると考えられる。理由としては、Bさんのサービス利用選択についてBさんのサービスを利用した際の状況から判断するしかなく、この選択がBさんにとってより良いものである必要があるため。 | <ul style="list-style-type: none"> ・コンサルテーション ・説明責任 ・批判的考察 |
| 3 | 情報収集 | <ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルワーカーの倫理綱領、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律、障害福祉サービスの利用等にあたっての意思決定支援ガイドラインなどの規程や法律、ガイドラインを考慮する必要がある。 ・相談支援専門員自身や成年後見人自身が個人的価値や職業上の要求、所属している組織の義務との間に矛盾はないかを振り返る必要がある。 ・また矛盾を振り返るために必要な場合コンサルテーションを受けることが求められる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・説明責任 ・批判的考察 ・コンサルテーション |

| | | | |
|---|---------------|---|--|
| 4 | 代替アプローチとアクション | <ul style="list-style-type: none"> ・意思決定支援会議にて情報の整理や関係者の価値観を検討し、Bさんの支援では、グループホーム（現在使用しているのとは別のサービス）を体験的に利用してもらいBさんのそこでの生活の様子を見ることで判断することになった。 ・根拠は、意思決定支援会議やBさんのサービス利用の経過から確認し、正当性を見出す。 ・他の選択肢を見逃した可能性はあるためコンサルテーションを受ける必要があると考えられる。 ・文化的な差別はないと考えられるが、無神経さを感じるものはあるかについては、Bさんの意思を本人に確認する方法は本当でないのかについての検討がなされていないのではないかという問題があると考えられる。 ・Bさんがグループホームを利用し、生活範囲が広がったことやより自由に生活できる様子を記録にまとめ、正当性を示すことができるのではないか、また情報収集の根拠とした法律やガイドラインから振り返りをする必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・説明責任 ・コンサルテーション ・文化的感受性 ・批判的考察 |
| 5 | 批判的な分析・評価 | <ul style="list-style-type: none"> ・この状況から自分の意思決定の方法について学んだこと、これまでの意思決定パターンから行動を変えたかどうかの考察をする。 ・今回の意思決定プロセスにおいて、自分が文化的に配慮した行動をとったことに、自信が持てるか、あるいは探究を怠った文化の側面はあるかを省察する。あるとすれば、Bさんの意思を確認する方法についての考察がなされていないのではないかという点にあると考えられる。 ・倫理的ジレンマについて適切なコンサルテーションを受けることができたか。 ・サービス利用者にとって悪影響を及ぼしそうな方針や手順、倫理規程、その他プロセスについての振り返りをする。また最終的にBさんのグループホームでの生活の状況から、Bさんの意思はグループホームにあることは明らかとしているが、そのことについて議論し、この意思決定について相談支援専門員としての役割について責任を持って説明することができるか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・批判的考察 ・文化的感受性 ・コンサルテーション ・説明責任 |

VI. おわりに

本稿において障がい者の意思決定支援過程で起こる支援者の倫理的ジレンマについて、倫理的意思決定の包括モデルの活用方法について検討することを目的としてきた。まずはMcAuliffeとChenowethの倫理的意思決定の包括モデルの概要について説明し、その後に障がい者の意思決定支援についての事例の内容分析を行うことで、事例の特徴や共起ネットワークから事例内容の特徴的な言語同士の繋がりを確認した。さらにこの共起ネットワークからは、言語同士の繋がりに倫理的ジレンマに繋がると考えられるものを抽出した。ここで抽出したものをすべて検討することはできなかったが、Bさんの事例（施設での生活を継続するかどうかの意思決定支援）について取り上げた。Bさんの事例は、共起ネットワークからは「福祉サービスとの関連」が見えてくことがわかり、ここから倫理的ジレンマとなりうることとして「選択と自律性」について取り上げることにした。ただし、この事例で記述されているのはBさん自身が言語的な意思の表出が難しいことと、経験したことがないことについての選択が難しいことから、まずは経験してもらうことで選択肢を増やす支援が行われている。これらのことから、選択する機会と選択する主体としての尊重がなされているように思われる。ただ、別の選択肢の存在やBさんに求められている自律がマイノリティの存在として抑圧された自律の可能性が検討されていないことなども踏まえる必要があったと思われるが、そこまでの検討には至っていない。

さらに障がい者の意思決定支援に関する事例をK Hcoderによるテキストマイニングを行ったが、活用した事例が5事例と少なく、さらに検討する事例数を増やし、そもそも意思決定支援に関する事例にて倫理的ジレンマが想定されているかどうかの検討を含めて行う必要があった。また、社会福祉にてサービスを提供する際にはStep 4の代替アプローチとアクションで説明されているように、倫理的意思決定の根拠となる理論をもっと丁寧に考察する必要があったと感じている。以上のことから、分析としては課題が多いものになったが、障がい者の意思決定支援の事例を用いて、倫理的意思決定の包括モデルの活用をその手順に沿って考えることは意義あるものだったと考えている。また、ここからさらに言えることとしては、この手順に沿った方法で支援者が遭遇する倫理的ジレンマについて意思決定していくにはある程度の

訓練と支援してくれるコンサルタントもしくはスーパーバイザーが必要なのではないかと感じた。今後もこれらのことを課題とし探究していきたい。

【引用文献・参考文献】

厚生労働省「障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドライン」、2017

Donna McAuliffe 「I'm still standing: Impacts and consequences of ethical dilemmas for social workers in direct practice」, Journal of Work Values and Ethics, vol.2, no.1.2005

Donna McAuliffe & Lesley Chenoweth 「Leave No Stone Unturned: The Inclusive Model of Ethical Decision Making」 Ethics and Social Welfare, 2008

樋口耕一「社会調査のための軽量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版」ナカニシヤ出版、2020

名川勝・水島俊彦・菊本圭一（編著）「事例で学ぶ 福祉専門職のための意思決定支援ガイドブック」、中央法規、2019

中山尚子「選択と自律をめぐる一考察—選好とケイパビリティアプローチ」立命館言語文化研究23巻4号、2012

Sarah Banks 「Ethics and Values in Social Work (2012)」／石倉康次・児島亜紀子・伊藤文人（監訳）「ソーシャルワークの倫理と価値」法律文化社、2016年

Sarah Banks & Robin Williams 「Accounting for ethical difficulties in social welfare work: issues, problems and dilemmas」, British Journal of Social Work, Vol. 35, no. 7, pp. 1005-1022, 2005

田岡紀美子・子ども学科講師・社会福祉学

